

## 第4部

## 交易と文化



# 01 海賊と海商

森田雅也

## 1 はじめに

タイトルの語は、すでにレジェンドとなっている語であるが、国際的には二十一世紀の今日でも過去の遺物とは言い切れず、その定義は難しい。本章では「海賊 (pirate)」「海商 (maritime commerce)」として論じていることを共有いただきたい。

「海賊」とは、本来、政府正規軍(水軍)と違い、公海上において、私的にほかの船舶の交通の安全を脅かす性質の暴力行為や船舶や沿岸を襲撃することによって金品を強奪する盗賊集団を指しているのである。その一方で、古代のヴァイキング (Viking) や中世のヴェネツィア共和国・ジェノヴァ共和国のような海洋通商国家が、自国、自民族の海商利益を防衛するために武装商船団を形成し、競争相手の船舶あるいは領土までも攻撃・略奪する場合も広義では「海賊」であるが、これは「海商」の域とも重なるので後述する。

ここで国際的な「海賊」史の概説を挟むべきであろうが、各国史、海洋史ともつながり、海洋法、海商法などに照らそうものなら、紙幅にいくら余裕があっても不可能であろう。また、東アジアの海域とは、広義では広大な地域を指すことになるが、世界地図の中ではなく、論者の浅学もあり、日本を海図の基点として論じるに留めたい。

## 2 古代の海賊・海商

「海賊」という語のイメージは、近年の映画『Pirates of the Caribbean』シリーズやアニメ『ONE PIECE』のような痛快な海洋冒険話を思い浮かべてしまうが、被害者の側から観れば法と秩序を遵守する人々が交通手段として船を選び、海の道を利用してゐるにもかかわらず、篡奪、もしくは生命の危機にさらされるのは、不条理極まりない行為である。古代において、朝鮮を含む東アジアの大陸の国々は危急存亡をかけて戦いを繰り返して、国家の興廢は目まぐるしかった。しかし、四方を海で囲まれた島国国家日本は、国内情勢は別として、一人、国家としては安寧の歴史を歩み続けた。それは海が自然の要害となり、夷狄侵入の楯となったからであった。さらに日本は大和朝廷統一以来、政治の中枢部である都は、外洋との沿岸から瀬戸内海を経た深奥部近くの奈良・京都近辺に置いた。瀬戸内海とは友ヶ島水道（紀淡海峡）、鳴門海峡、豊予海峡、関門海峡の四海峽（瀬戸）によって外海と隔てられた内海を指し、東西の長さは大阪湾と関門海峡間で四五〇キロメートル、南北の幅は二〇〇五五キロメートル、島々の数は大小あわせ、七百を超えるるとされる。これらの島嶼を皆に見立てるなら、難攻不落の立地に都を据えた国家といえよう。

ところが翻って、国内の海上交通・物流の安全性となれば、この島嶼は海賊の格好の隠れ家であって、瀬戸内航路を行く船は、か弱い子羊となってしまう。

古代日本は律令制による中央集権的な統治制度国家であった。しかし、十世紀末頃からは不輸入の権などの行使により、一部特権階級による荘園制度となっていく。いずれの場合も輪租（田租を国家に納める）のため、地方から都へ京進（荘園・公領の年貢・公事・段銭などを京都に進上納入すること）が行われた。律令制度においては基本的には陸上輸送を旨とすべしとしていたが、『統日本紀』によれば、天平勝宝八年（七五六）十月の太政官処分から海上輸送が公認された。逆にここから海上輸送の保全是国家の責任において担わざるを得なくなつたのである。従つて海上輸送を襲い、私的に略奪を行つたり、危害を加えたものは「海賊」として、日本国家から追捕されることとなつたのである。

そのような背景として、この頃すでに日本近海に先述の「海商」利益を防衛するために、武装商船団が組織的に形成され、無法行為を繰り返していたことが想像できる。

### 3 八〇九世紀の海賊・海商

八〇九世紀の東アジア海域を支配していた人物として、張宝高（？〜八四一年）が有名である。

新羅人で、新羅の政界および新羅・唐・日本間の貿易に活躍し、名前を『三国史記』『三国遺事』などでは弓福・弓巴、杜牧『樊川文集』では張保臯、『続日本後紀』『入唐求法巡礼行記』などでは張宝高とする。近年、韓国が『海神』としてTVドラマ化し、「チャンボゴ(장보고)」として日本でも放映されたことでも知られている。はじめは、唐（中国）徐州の軍人であったが、帰国後海賊の取り締まりで功をたて清海鎮大使となり、韓国・全羅南道「莞島(완도군)」を拠点として、日本・新羅・唐の三国間の海上貿易で巨万の富を得た。日本とは遣唐使の入唐に便宜をはかり、私貿易を行い、大宰府および筑前国守文室宮田麻呂らと密接な関係を持ち、承和七年（八四〇）十二月には朝廷に使者を遣わすなど、かわり合いは強い。

この動きは中世期に海上交通と商品流通機構を整えた島国イギリスがヨーロッパ大陸の封建体制の崩壊期に資本主義を打ち立てていった情況に似ている。海洋経済圏が国家の枠を超えて、各国の同志的な資本提供と結んで、新しい「資本制」を築き上げたのである。しかし、張宝高は不慮の死を遂げる。その志は大なり小なり東アジアに影響を与えたであろう。

その頃、日本でも中央は藤原氏を中心に私物化され、さまざまな形で反抗が起こっていた。とくに承平・天慶年間（九三二〜九四七年）の乱は関東一帯を支配し、独立王国を目指した平将門（？〜九四〇年）の乱は、鎮圧されたものの中央の心胆を寒からしめた。その同時期に、まさに瀬戸内海の海域を中心として起こったのが藤原純友（？〜九四一年）の乱であった。

九世紀後半に入ると、西国では、租税や力役の負担をのがれる農民が、富豪を中心に党をつくって船を襲い、物資を掠奪する動きを示し始め、朝廷はこれらの海賊の追捕に腐心した。藤原純友は、伊予掾の官職のまま、伊予の日振島を根拠地として船千余隻を率いて各地で掠奪を行う「海賊」行為をしていた。平将門の乱が起ると、それに呼応するように大規模な略奪行為をし、淡路・讃岐・伊予・備前・備後・阿波・備中・紀伊・大宰府・周防・土佐の各地を襲い、山陽南海道、すなわち、瀬戸内海の制海権を得ることとなる。しかし、将門の乱の鎮圧後、配下の裏切りなどから、まもなく沈静化する。

しかし、瀬戸内海の航海の安全が中央によって保たれることはなかった。日本文学でも古代、中古文学には武威のない、無抵抗な僧侶、貴族などが海賊に怯える姿が多く描かれている。たとえば、平安時代初期成立とされる『日本霊異記』には、百濟からやってきた救済和尚が亀を助けたが、後日、和尚が海賊に襲われ、瀬戸内の海原に放り出されたとき、亀たちが背中に乗せ、溺れさせなかつた報恩譚をあげている。『宇治拾遺物語』では、あるひ弱な僧が乗る船が瀬戸内の安芸沖で海賊に襲われ、海中に投げ込まれたものの、経典を離さず浮いている姿に、逆に海賊の方が仏道の奇特を見、発心出家したと語る元海賊の老僧の悪漢小説風懺悔話があるが、相当な手荒い無慈悲な襲撃方法であったことがわかる。

海賊襲来にも為す術がなく、ただ神仏に無事を祈る姿は、『土佐日記』に作者紀貫之の実体験のこととして記されているが、この場面を江戸時代後期、読本作家上田秋成が『春雨物語』『海賊』として潤色した際、海賊が紀貫之を凌駕せんばかりの歌学、史学に秀でた人物として脚色していることは注目できる。もちろん、これは国学者上田秋成が持論を仮託した、術学的とも言える人物であり、殊の外、教養人に造形されている。しかしながら時代に限らず、船頭、船主にあたる「水主」は、潮流はもとより、地形、天候、天文、操舵、海運、交通、海上法、経済、政治等の情報力を持った知識人であったはずである。そのような彼らを束ねる頭領とも呼ぶべき人物はさらにこれらに秀でた超インテリであって、戦国期に大名さながらに活躍した「村上水軍」「九鬼水軍」といった集団例があがるのであ

る。

「海賊」無法時代の平安時代に話を戻せば、この萌芽しつつあった海賊の知的リーダーと中央政権は、対立から妥協点を見いだしていくことになる。すなわち、海上輸送において護衛を「海賊」に依頼するのである。輸送者は何らかの名目で報酬を海賊に支払わねばならないが、対価として、瀬戸内の島々の潮流事情や風向きなどに長けた水先案内人を得、ほかの海賊からの略奪にあわないという安全性を確保できるのである。もちろん、ある特定の海賊を雇ったためにほかの海賊との縄張り争いに巻き込まれる危険性はあるが、それでも無防備の丸裸で未知の海域に挑むより安全であった。

#### 4 日宋貿易と倭寇

これらの各地域の海賊を支配下におき、「海賊」から「水軍」として自らの一族の勢力拡大に利用したのが伊勢平氏の棟梁、平清盛（よしみち）の父、平忠盛（ただしげ）であった。平忠盛は中央政権にも取り入り、八九四年に遣唐使が停止されたから、下火であった日中貿易にも参入していった。これが「日宋貿易」である。忠盛の死後、平清盛はその東アジア交易で得た資本をもとに瀬戸内海航路を整備し、大輪田泊（おおわだのとまり）（現兵庫県神戸市）を国際港とし、巨万の富を得るようになる。その点では、明治政府の庇護の元、「三菱」として急成長をとげた岩崎弥太郎（いわさきやたろう）に似通っており、「平清盛」をして、日本の「海商」の濫觴と呼べるかも知れない。

日本の政権が藤原政権から院政を経て、平氏政権、源氏政権となっても、この「日宋貿易」は続いたが、日本を含む東アジアの安寧が大きく崩れることとなる。「元」の登場である。元は日本にも文永十一年（一二七四）、弘安四年（一二八二）の二度にわたり、海を渡って襲来してきたが日本側から言えば、いわゆる「元寇」である。チンギス・ハンの蒙古は、東アジアのみならずユーラシア大陸まで席卷したが、ここで「元寇」の詳細は避けたい。ただ、最近の研究では「元」は当初、日本を武力支配しようとしたのではなく、海上交易を望んでいたという見解が定着しつつあ

る。その意識が行き違いとなり外交問題となり、武力衝突に発展したというのである。事実、日元の衝突下でも民間レベルでの貿易関係が維持され、一二七六年、元は泉州、広州、慶元、上海、澈浦に市舶司を設けて貿易の管理にのりだし、七八年には宣戦の国書の主であるフビライ自身が日本商船の貿易を許可している。

ただ、東アジア海域の問題としては、「元寇」よりも「刀伊の入寇」事件までさかのぼる必要がある。刀伊とは朝鮮語で夷狄のことであるが、日本では沿海州地方に住んでいた女真族をさす。寛仁三年（一〇一九）三月、高麗を襲った女真人が五十艘余の船に分乗し、壹岐、対馬に襲来し、ついで筑前国（福岡県）怡土郡を侵し、志麻郡、早良郡を略奪し、さらには大宰府まで襲った。このときの被害者たちの子孫は再び、「元寇」によって、劫掠・虐殺されることとなる。彼らは当時の朝鮮国高麗は元の支配下であり、その命によったとは言え、中朝連合軍として攻め入ってきたと理解し、個々の集団を作って中国、朝鮮に報復攻撃を行うようになった。これが「倭寇」の始まりとされる（清・徐繼畲『瀛環志略』、朝鮮・安鼎福『東史綱目』等）が妥当な見解であろう。とくに被害の大きかった長崎・対馬の松浦党が海賊集団を形成し、「倭寇」の中心集団と目されるのも諒解できる。ただ、主に十三〜十六世紀に活動した「倭寇」は朝鮮、黄海海域にとどまらず、東シナ海、南シナ海にまで及んでおり、その行動目的もさまざまであり、単なる略奪を目的とした者たちから、領土侵略を企図してその国の正規軍と争う者たち、海上交易の利権確保をもとめる者たちなど、すべてを「倭寇」として一括りにしてはまとめられないほど多様化する。また、民族も初期のように日本人だけでなく、たとえば、一五五四年六月に濟州島において、唐人と倭人が同乗する「荒唐船（황당선）」（倭船か唐船かが不明瞭な海賊船を指す朝鮮側の呼称）が朝鮮の水軍と衝突するという事件があったが、これは博多・平戸など西北九州の貿易基地と漳州（中国・福建省）・湖州（中国・浙江省）を結ぶ交易ルートがあり、そこで唐人・倭人が商う日本銀をめぐってのトラブルが原因であった。この時期、日本は世界有数の銀の産出国であったため、東アジア海上交易の商品の中心は良質な日本銀であった。一五四二年頃、ポルトガル船がイスラム教徒の船を襲い、積み荷を奪ったところ、その大部分は平戸から漳州へ向かう別のイスラム船から奪った日本銀であった（メンデス・ピント著『東洋遍歴記』）と



いう例もあり、いかに東アジアの海域に多くの民族が海賊として跋扈していたかがわかる。また、十六世紀半ば、平戸・五島諸島を本拠地として倭寇の首領「徽王」こと「王直」が猛威をふるうが、彼は元来、明の歙県（安徽省・黄山市）出身であった。明の禁輸品・火薬等を交易する海商として活躍するうちに、明の官吏、奸商、貴家などの密貿易仲間として追捕され、日本の松浦党、五島海民、瀬戸内の村上氏、豊浦大友氏などを率い、史上最大の倭寇を組織することになったのである。このように倭寇の歴史は、東アジア海域の人々の交易と紛争の歴史とも言えるのである。

しかし、当然ながら、倭寇の活躍は東アジア海域諸国全体の国際的安全保障問題となり、王直が密貿易を理由に明政府に召喚され処刑されたように、日本も近隣諸国から自国の倭寇の嚴重な取り締まりや撲滅を迫られることとなった。室町幕府も十四世紀頃は、明・朝鮮とともに盛んに倭寇を取り締まり、明軍の「望海埒の戦い（一四一九年）」によつて沈静化させたが、朝鮮軍が「応永の外寇（一四一九年）」によつて対馬を倭寇の拠点と目して、その占領を企図して攻め込んで来たことから、かえつて倭寇対策が消極化してしまったという経緯がある。

## 5 勘合貿易

その後、室町幕府は応仁の乱などで弱体化し、代わつて地方の有力大名が勢力を拡大していったが、彼らも又、海民たちの一部が倭寇に関係する集団を知りつつも、戦時には水軍として与力してもらつて可能性や外敵からの海上防上の利点から、積極的に撲滅しなかつた。

ただ、脆弱な室町幕府であつたが、日本を代表して中国と正式な海上交易も行った。いわゆる「勘合貿易」であるが、勘合符とは明が発行する通航証明書であつて、貿易許可書ではないので、国家間の正式な交易という意味では、「日明貿易」と呼んだ方が実態に即している。日本からは刀剣、硫黄、銅、蘇木、扇、蒔絵漆器、屏風、硯等が輸出されたが、最も必要とされていたのは先述の「日本銀」であつた。対貨としては銅銭、絹、布等が支払われた。とくに明の「銅銭」は日本の通貨でもあつたから重要であつた。しかし、室町幕府の衰退とともに、本来、「勘合船」は名義上、

足利將軍の派遣すべきものであったが、実際の経営者は有力守護大名や大寺院で、博多や堺の商人がそれらと結びついて行く。のちには細川・大内両氏によって勘合の争奪がおこり、その結果、大永三年（一五二三）、両氏の使節が寧波で衝突して争乱に及ぶ。いわゆる「寧波の乱」である。その後勘合は大内氏の独占に帰し、同氏が滅亡するまで勘合船は大内氏によって派遣された。従って、大内氏は、日明貿易によって巨額の富を得、九州の一部から中国地方を領し、その勢力は盤石となる。一方、大内氏以外の戦国期の大名も豊かな領地経営のためには、明との交易は欠かせず、私貿易に頼るほかはなく、結局、倭寇の密貿易を利用することとなる。

その大内氏や有力戦国大名も滅び、日本が織豊政権によって天下統一されていく過程で、倭寇は水軍に吸収されて、その頭目は一大名として支配下に置かれていく。当然、海賊行為はなくなり、海の交易航路はかつてない安全性を保つこととなる。

もちろん、アジア海上交易の意義は、ヨーロッパからの海商などの活躍から活況を呈していく。それが十六世紀後半の「南蛮貿易」であり、十七世紀前半の「朱印船貿易」であり、博多や堺には海上貿易の独自ルートを持つ海商が生まれ、莫大な富を稼ぎ出していく。その背景には、輸出品として最も必要とされる「金」「銀」が、当時の日本では世界有数の産出量を誇っていたという事情がある。造船技術も高くなり、日本はアジアのみならずヨーロッパからも経済大国として世界的に認知されていく。やがてキリスト教の布教とヨーロッパ列強による植民地政策に危惧した徳川政権によって、いわゆる鎖国政策がとられ、外洋進出は禁止されるが、長崎の平戸・出島、朝鮮、琉球などから「金」「銀」は流出し続け、十八世紀を迎える頃には、海外貿易によって栄える大商人はいなくなってしまう。

## 6 博多と堺の海商

さて、翻って、その博多と堺の海商たちであるが、まず陳者、「博多海商」の歴史は古い。遣唐使派遣の七世紀頃、博多湾には海外からの使節を受け入れる迎賓館「筑紫館」が造営され、これが遣唐使派遣停止（八九四年）後は「鴻臚

館」と名を改め、唐の官人、商人たちを迎えて交易の場として賑わいを見せた。さらには先述の国際的海洋交易に明るい伊勢平氏と結びつき、平清盛の時代には日宋貿易の玄関口として博多湾が整備され、大輪田泊につながる国際交易ルートが確立したため、多くの中国商人たちも住み着き、国際貿易港として大きな役割を果たした。彼ら貿易商人は「綱」という組織を作り、その「綱」を束ねる者を「綱首」と呼んだ。その博多綱首の代表格が「謝国明」（生没年不明）である。彼の拠点とした玄界灘の小呂島（福岡市西区）は中国・朝鮮航路の要地にあたり、貿易拠点としては絶好の場所であったため、海上貿易で巨利を得た。しかし、彼は貿易で得た巨額の富を禪宗の普及や貧民救済にもあて、博多の人々から尊崇を集めた。この商人が海上貿易で得た利益を文化活動や社会貢献に還元する剛毅な姿は、後の博多豪商の原型となっていく。「元寇」によつて荒廃した博多であるが、元朝が明朝となると、日明貿易の窓口となり、巨額の富を得る。しかし、そのために戦国武将の争奪の場となり、個々の商人はしたたかに生き残らねばならなかった。豊臣秀吉が天下統一すると、「太閤町割」による博多復興計画が計られ、それに協力した商人は海上交易に関する庇護を受け、類似希な豪商として名を残すこととなる。中でも「博多三傑」と呼ばれた神屋宗湛（一五五一〜一六三五年）、島井宗室（一五三九〜一六一五年）、大賀九郎左衛門（？〜一六四一年）が有名であるが、とくに宗湛は中国貿易に、宗室は朝鮮貿易でその名を馳せることになる。しかし、彼らも秀吉の死去・豊臣家の滅亡とともに力を失うが、大賀家は朱印船貿易における糸割符を得て、一族の一部が博多を支えることとなる。

堺の海商は、南蛮貿易とともに栄える。日本からの輸出品が当時世界的産出量を誇った「銀」であったことは再三述べてきたが、代わりに多く輸入された品は、外国産の良質な生糸・絹織物であった。なるほど、十六世紀半ばに鉄砲が伝来し、いわゆる戦国時代の戦術が大転換し、鉄砲を多く有する大名が天下に号令できるようになったので、鉄砲をヨーロッパから大量に輸入したかのようなイメージがあるが、鉄砲は天文十二年（一五四三）、種子島に輸入されるや、一年ほどで島の鍛冶たちに模倣され、瞬く間に全国各地で国産の鉄砲が制作されるようになった。生産地としては泉州堺・江州国友・江州日野が有名であるが、全国の戦国大名のもとにに応じて、多くの物資とともに鉄砲を交

易したのは堺商人が多かった。

堺商人の活躍は博多商人より遅い。勘合船との関係で述べた山口の大内氏は十五世紀の応仁の乱前後から、畿内でも勢力を振るい、瀬戸内航路に面した兵庫、続いて堺を掌中に収めていく。そのことによって博多・堺など九州、中国地方から海運ルートを整備していくが、大内氏が東アジアの海上貿易までも手を広げたことによって、堺商人は博多商人とともにスペイン・ポルトガルなどとの国際交易にも乗りだし、世界に知られた「海商」集団として巨額の富を築いていく。天王寺屋の津田宗久、今井宗久、呂宋助左衛門、千利休などが有名である。また、堺商人たちは、戦乱で室町幕府や摂津・泉州の大名たちが急速に疲弊し、支配力が弱まったのに乗じて自治力を高め、会合衆と呼ばれる三十六人のもと、西欧の自治都市のような独自の組織が形成され、大いに繁栄することとなる。しかしながら、十六世紀後半になると自治都市「堺」も織田信長、豊臣秀吉という強力な支配者の前に屈し、十七世紀に入ると徳川政権による「堺」解体、大坂夏の陣による「堺」焼亡、大和川の付け替え工事などによって、往時の堺の「海商」の姿は消えてしまうことになる。

## 7 朱印船・糸割符

この博多・堺の「海商」終焉と自由な国際海上交易を禁止した鎖国体制の完成までに光彩を放った「海商」たちがいる。それが「朱印船貿易」「糸割符貿易」にかかわった人々である。

「朱印船貿易」の定義は難しいが、一般的には豊臣秀吉、徳川幕府が倭寇や海賊と日本公認の海商を区別するため、大名や商人に朱印を与え、西洋貿易を許可したための呼称であるが、その貿易による巨利は十六世紀晩期から十七世紀初頭の日本の好景気を支えた。大名は島津・松浦・鍋島・亀井・加藤・五島・有馬・細川など、主として西国大名で、外人には三浦按針(ウイリアム・アダムス William Adams)、ヤン・ヨーステン (Jan Joosten) など十名余、中国人では在留民の頭李旦(リタン)や林五官(リンゴカン)など十名余いたが、商人では京都の角倉了以(かくら りょうい)父子・茶屋四郎次郎(ちやうや しろうじろう)、大坂の末吉孫左衛門(すえしよんざゑもん)、長

崎の末次平藏・荒木宗太郎が最も有名で、そのほかの多くも京・大坂・堺・長崎などの主要商業都市の商人であった。とくに大商人の物語は、仮名草子・浮世草子のモデルとなり、後の井原西鶴（二六四二―一六九三年）の『日本永代蔵』（貞享五年「二六八八」刊）にみる致富談のように、商人憧れの理想像となるが、鎖国体制が整うにつれて、非現実的な過去の商人像となり、庶民から忘れられていく。

これと重複・並行して「糸割符」貿易が注目されるようになる。日本国内の戦乱期を終え、絢爛な小袖など平和を謳歌するようになった富裕層の登場によって、生糸・絹織物に対する需要は高まり、良質の生糸をもとめて、先述の国産「銀」「金」と国外との海外貿易が盛んとなった。「糸割符」貿易とは、輸入白糸を糸の「しるし（題糸高）」をもつてこれを割ることに由来するとされる。徳川幕府は輸入白糸を統制した貿易仕法として、糸割符仕法を慶長九年（二六〇四）に成立させ、海外へ多額な日本銀が流出するのを防ごうとした。そこで白糸貿易の中心地、堺・京都・長崎の豪商の中から糸割符年寄を選任し、糸割符仲間を作らせ、彼らに輸入白糸の購入、販売を独占させ、価格の統制・管理にあたらせた。当初は中国、ポルトガルが対象であったが、マカオ商人との交渉やスペイン・イギリス・オランダなどが介入し、活況を呈したが、日本銀の流出は止まらず、明暦元年（一六五五）、糸価の高騰などを理由にこの制度は廃止された。それまでの鎖国体制で、イギリス・スペイン・ポルトガル船の来航は禁じられていたため、中国・オランダだけが生糸貿易の対象国となったが、両国の窓口も長崎に限られていたので長崎貿易として栄えるようになる。しかしながら、再三の銀輸出規制にもかかわらず、長崎からの絹輸入による銀の流出は押さえられないため、再び、堺・京都・長崎の豪商を加えて、国産絹を加えることで絹糸の販売統制を行った。次第に、国産絹が増産されたことと贅沢禁止令などにより、絹布市場は安定したが、貿易に巨利をもとめる「海商」の姿は消滅することとなった。

## 8 おわりに

江戸時代、鎖国体制の完成後も海外との交易は続くが、外洋へ出て自らの船での取引が禁じられた以上、「海商」と

して一攫千金を夢見ることはなくなり、日本文学の中にも「海商」としての英雄伝説も描かれなくなる。わずかに井原西鶴の浮世草子に千石船の利点を説く箇所が多いことや「海と船」に関する句が多いことや、近松門左衛門（二六五三〜一七二四年）の『博多小女郎波枕』（一七二八年）のように、「海賊」「密貿易」を題材とした作品があるが、そのほかの海洋作品は漂流物、島流し物などに偏っていく。それは遠洋航海術である沖合航法より沿岸航法に適した西廻り航路、東廻り航路の千石船が海上流通の主役になり、それらの船が着く河口の港へ通じる川船などに日常のドラマを見出すこととなったからであろう。

すでに紙幅が越えている。十六世紀から十九世紀における日本以外の東アジア海域における「海賊」「海商」に触れていない。これには数ある論文集の中で体系的にまとまった、東洋文庫編『東インド会社とアジアの海賊』（勉誠出版、二〇一五年）を参考文献として紹介し、結びとしたい。

#### 参考文献

- ・ 朝尾直弘編『日本の近世』1、中央公論社、一九九一年。
- ・ 網野善彦『蒙古襲来』、『日本の歴史10』小学館、一九七四年。
- ・ 鮎貝房之進『朝鮮姓氏・族制考』国書刊行会、一九八七年。
- ・ 石野博信編『古代の『海』の道』—古代瀬戸内海の国際交流』学生社、一九九六年。
- ・ 岩生成一『新版朱印船貿易史の研究』吉川弘文館、一九八五年。
- ・ 宇田川武久『日本の海賊』誠文堂新光社、一九八三年。
- ・ 尾崎朝二『拓かれた五島史』長崎新聞社、二〇一二年。
- ・ 小林昌二『藤原純友の乱』、『古代の地方史』2、朝倉書店、一九七七年。
- ・ 佐藤和夫『海と水軍の日本史・下』原書房、一九九五年。
- ・ 田中健夫『島井宗室』吉川弘文館、一九六一年。
- ・ 田中健夫『倭寇 海の歴史』教育社、一九八二年。
- ・ 田中健夫『倭寇と勘合貿易』至文堂、一九六一年。

- ・ 中田易直『近世対外関係史の研究』吉川弘文館、一九八四年。
- ・ 永留久恵『対馬国志』第二卷 中世・近世編、交隣舎出版企画、二〇一二年。
- ・ 松原弘宣『古代国家と瀬戸内海交通』吉川弘文館、二〇〇四年。
- ・ 村井章介『中世倭人伝』岩波新書、一九九三年。
- ・ 森田悌『王朝政治』講談社学術文庫、二〇〇四年。
- ・ ヤツエク・マホフスキ著、木村武雄訳『海賊の歴史』河出書房新社、一九七五年。
- ・ 山脇悌二郎『日本歴史叢書・長崎の唐人貿易』吉川弘文館、一九九五年。